

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(解答するとき、字数制限のあるものについては句読点や記号も字数に数えます。)

つい何日前、NHKで里山の番組を見た。人が自然と共に生きている琵琶湖西岸びわこの美しい映像であった。ぼくは自然の中に吸い込まれていくような気持ちでじっと見入っていた。

そのうちにぼくはふと気づいた。自然の中に吸い込まれるというこの表現は、里山については適切なものではないのではないかとということに。

なぜならいつも言われているとおり、「里山」はけっして「自然」ではないからである。

もともとの自然の中に人間が入っていき、木を伐きつたり、草を刈きつたり、いろいろな働きかけをしていることによって生まれたものが里山である。

もともとの自然は深くこんもりした林であつただろう。そこはあまり日もささず、うす暗くひんやりしていて、あまり快適な場所ではなかったにちがいない。少なくとも①そこに腰をおろし、のんびり弁当でも開いてくつろぐという気になる場所ではなかったろう。

しかし人が入っていつて薪にする木を採り、小屋を建てる材木を伐り出し、あるいは林の緑を切り開いて小さな畑を作つたりというようなことをしていくと、林は少し明るくなり、やがて明るい場所を好む草や灌木かんぼくも生えてくる。

その草木に花が咲けば蝶もやってくるし、花蜂たちも訪れる。草木にはいろいろな虫がついて葉を食べる。そしてそのような虫たちを求めて小鳥たちも姿を見せる。きつとこんなふうにして林は少しずつ変わっていったのだろう。

そこにはいわゆるエコトーン、すなわち自然の傾斜ができてくる。深い林から少し開けた明るい林、そして草地、畑、人家という傾斜が。

これが「里山」なのだとは思っている。つまり里山は「里山」という「山」ではなく、人と自然が コウサク するところ、基本的には人里なのである。

そこでは人と自然が共に生きているのではない。人は自然の中に入っていつて、自然に何らかの働きかけをする。そこをただ歩くだけでも、それは働きかけである。人は地面に生えた草を ブ み、何匹かの虫を払い落としたりフみつぶしたりする。木も伐るであろうし、草も刈る。

しかし自然も負けていない。伐られた木は元の状態に戻ろうとして若枝を伸ばし、草はまた生えてくる。虫たちもせっせと子孫を残す。こうして②人と自然のせめぎあいが続いていく。これが里山であり、人里である。

こうして生まれた里山は、もともとの深く暗い林とちがって、人間が親しみと安らぎをおぼえる場所になる。それが近年の里山賛美の源であることは疑いない。

けれど③里山を賛美するあまり、奇妙なこともおこっている。たとえば里山への人の立ち入りを禁止したり規制したりというものもその一つだ。

人が入って働きかけることをやめれば、里山の自然はたちまちにして元へ戻っていく。それは人間の入って行きにくい、少なくともあまり快適ではない場所になってしまい、たちまちにして里山の「荒廃」がおこる。今や各地で、里山の荒廃が問題とされるに至っている。

その一方、里山の美への憧れはますます高まっている。里山の美しい映像は人々の心を打ってやまない。どうやら人々は、そこに自然の美を求めているように思える。今やつと、人工の美ではなく自然の美を求める気持ちになってきたのだろうか？ もしそうであるのなら、それは喜ばしいことであろう。

でも果たしてこれで十分なのだろうか、ぼくはときどき考える。

少し前に述べたとおり、里山はけっして自然そのものではない。それは自然と人間のせめぎあいの産物なのである。もしこのことを忘れると、人間は徹底した自然と徹底した人工とを求めることになりはしないだろうか？ それは何か非現実的で不自然なことになってしまふような気がしてくる。

地球上で徹底した自然というのは、地震とか。ブンカとか暴風、大雨などのように、人間にとって恐ろしいものであることが多い。人間はそれを求めてはいないし、美しいものとも思っていない。

一方、人間は人工物を徹底的に発達させ、その利便さを享受している。

それはそれでよいのだし、それが人間の偉大さでもあるのだが、人々はそこに一抹の不安をも感じている。その反動が自然礼賛らいさんの気持ちの源であることも否いなめない。どうやら人間は、何か④両極端の間をさま迷っているのではないだろうか？

そんなふうに思ってみると、里山というのは意味ぶかいものである。それは繰り返して言うとおり、里山が自然と人間のせめぎあいの産物だからである。

人間は雨露をしのぎ、できるだけ快適に暮らすために、自然の一部を⑤破壊して家を建て、町を作る。家や町の中に自然が入り込んできてほしくない。そこで人間は自分のまわりを管理する。

庭は自分の思うようにしつらえ、道路も交通も管理する。子どもの遊び場までもきちんとしつらえ、人工の遊具を設置する。都市は計画的に作られ、建物もできるだけ自動化する。こうして能^{あた}う限り利便性に富み、安全な人工的環境ができあがる。けれどたえず報道されるとおり、そこにはさまざまなそして予見しがたい危険が^d夕^eえないのだ。

人間と自然のせめぎあいの結果として生まれた里山は、⑥これとはかなり異なっている。

それはそれほど利便性に富んだものではない。けれどそこでは何らかの安らぎを感じることが出来る。危険はないことはない。早い話がうっかりすれば蚊やときには蜂に刺される。子どもが木に登って遊んでいけば、落ちることもある。けれどその危険の多くは、人工的遊具の場合と違って予見できる。そういう危険を予見するトレーニングは、生きていく上で、フカケツである。

自然を追い払ってすべてを人工的に管理することより、身のまわりに自然とのせめぎあいの場を残した人里に生きるほうが楽しいのではないだろうか。

(日高敏隆『セミたちと温暖化』による)

問1 —— a s e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 —— ①「そこに腰をおろし、のんびり弁当でも開いてくつろぐ」という気になる場所」とありますが、このような「場所」のことを本文中の別の箇所では何と表現していますか。これより後から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問3 —— ②「人と自然のせめぎあいが続いていく」とは、どのようなことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人が自然に介入して新しい状態を作るのに対し、自然はそれを復元しようとして、両者が相争う状態が続くということ。
- イ 里山の美に憧れて自然を賛美する人間と、本来の自然を求めて里山への立ち入りを禁じるような人間の対立が続くということ。
- ウ 人が自然への働きかけをやめ、里山の自然が荒廃し、そこでまた人が働きかけをする、ということを繰り返すということ。
- エ 人が自然を守るために、いろいろな働きかけをするたびに、自然はそれを元に戻そうとして、やっきになるということ。
- オ 人が自然の中に吸い込まれていくようなくつろいだ気持ちになっているところに、たえず蝶などの虫も集まってくる。

問4 —— ③「里山を賛美するあまり、奇妙なこともおこっている。たとえば里山への人の立ち入りを禁止したり規制したりというものもその一つだ」とありますが、「里山への人の立ち入りを禁止したり規制したり」することがどうして「奇妙」だのですか。次の空欄

A (五字以内)、	B (四十字前後) にあてはまる表現を考え、答えを完成しなさい。
A ために里山への人の出入りを規制したり禁止したりすることは、	B

問5 —— ④「両極端の間」とありますが、何と何の間ですか。解答欄に合うよう、本文中から抜き出して答えなさい。

問6 —— ⑤「破壊」の対義語を答えなさい。

問7 —— ⑥「これ」とは、何を指していますか。これより前の本文中から、二十字以内で抜き出して答えなさい。

問8 次のア～オの中から、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、人工的環境を求めた結果、自然の中に入っていき、自分たちの手で木を伐ったり草を刈ったりして里山を作り出した。
 イ 本来の自然の美しさを愛してきた人間は、手つかずの自然を賛美し後世に残すために人工的なものは持ち込まないようにしていた。
 ウ 人間はできるだけ快適に暮らすために自然の一部を破壊して環境を整えたが、実はそこには予測不能な危険も常に存在している。
 エ 人と自然が共に生きる里山は、利便性に富んではいないが安らぎを感じる場所であり、予見できる程度の危険が存在するだけである。
 オ 自然とのせめぎ合いの場を残した里山には、自然が引き起こす予見できないような危険が存在することを知っておく必要がある。

㉒ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(解答するとき、字数制限のあるものについては句読点や記号も字数に数えます。)

夕陽が沈み、あたりは少しずつ藍色の世界へと染まっていく。

田んぼの水面が深みを帯びはじめると、あちらこちらでアマガエルの鳴き声があがりだす。

仕事帰り。田んぼの畦に座りこみ何やらもぞもぞやっている息子の姿を見つけた父親は、道はずれてそちらに近づいた。畦に足をふみ入ると、泥の香りがむんと立ちのぼる。

「こんなところで何やってんだ」

少年は、声のするほうへと顔を向けた。

「なんだ、お父さんか」

「悪かったな、おれで」

父親は少年の隣に座りこむと、笑いながらそう言った。

「いつも仕事で遅いのに、今日は珍しく早いんだね」

①「きょうはとくべつな日だからなあ」

少年は首をかしげた。

「何かいいこともあったの?」

「ちよつとな」

「分かった、今日は結婚記念日でしょ?へえ、今年はちゃんと覚えてたんだ」

②「父親は苦笑を浮かべて言った。」

「去年のあれは気まずかったなあ。でも、あいにく今日は結婚記念日じゃない。そんなことよりも、何やってんだよ。もうすぐ夕食だろ」
 「べつに」

「なんだ、隠すなよ」

少年はしばらくのあいだ黙っていたが、やがてがさがさとポケットの中をあさりだし、何かを取って手に載せた。

「コレを練習してたんだよ。本物の声を聞きながら練習すれば、少しはうまくなるかと思って」

少年の手にあったのは、マッチケースほどの小さな紙箱だった。薄暗闇に、かわいらしいカエルのイラストがにじんでいる。カエルガム六粒入り、という文字が読みとれた。

「おお、懐かしいな。まだあったんだなあ」

感慨深げに言う父親を見て、少年は意外そうな顔をした。

「知ってるの?」

「知ってるもなにも、お父さんが子供のときからある駄菓子だよ。いや、ほんと懐かしい」

「ナカヤで買ったんだ」

「駄菓子屋の?懐かしいなあ。あのおばちゃん、まだ元気かな」

「おばあちゃんならいるけど」

「じゃあ、たぶんそのヒトだ」

父親は、遠い過去を振り返るように目を細めた。

「ナカヤは、むかしから小学生たちのたまり場であ。学校から帰ると、ほんの少しのお金を握りしめて男子も女子もよく遊びに行ったもんだ。ミニラムネにモロッコヨーグル。サイダー餅に色とりどりのこんにやくゼリー。見渡す限りの駄菓子。山は何度見ても飽きなくて、いつも宝探しでもしてる気分ですごくワクワクしたもんだ。なかでもお父さんの一番のお気に入り、それがこのカエルガムだったんだよ」

その言葉を聞いて、少年の目が a にわかに輝きはじめた。

「じゃあ、お父さん、これできるの？」

「愚問だな。お父さんは学年ナンバーワンって言われてたくらいだよ」

「ほんとうに？ やってみせてよ！」

父親が胸をはってうなずくと、少年は b いそいそと箱を開け、中から黄緑色の玉をひとつ取り出した。父親はそれを受け取ると、口にふくんで噛みはじめる。

「最初によく噛んで、じゅうぶん柔らかくしておくことが重要なんだ」

黄昏に、アマガエルの鳴き声がだんだん高くなっていく。

「こんなもんな。ほんとに久しぶりだなあ。まあ、見てろよ」

父親は、準備体操でもするかのように口の中で舌をもごもご動かした。

そのときだった。

少年のしている目の前で、ガムがぷくつと膨らんだ。それはみるみるうちに大きくなって、すぐにこぶしくらいの大きさにまで成長した。

と、次の瞬間。

父親は膨らんだガムの空気を少し吸い、そのままわずかに萎ませた。と思うが早いか、今度はすぐさまそこに空気を吹きこんで、ぷくくり大きく膨らみます。そして次には萎ませて、そうかと思えばまた膨らみます。同じ動作を、何度も何度も繰り返した。

そのリズムが整っていくにつれて、少年は信じがたい音を耳にすることになった。あまりの驚きで、思わず叫び声をあげてしまったほどだった。

「すごい！ 本物とおなじだ！」

膨らんだり萎んだり、今やガムは本物のカエルの鳴き袋と見紛うばかりの動きを見せていた。

しかし、似ているのは動きだけではなかった。あろうことかガムからは、そこから聞こえてくるアマガエルの鳴き声と寸分たがわぬ音が響いてくるのだった。

気がつくど、あたりはカエルの大合唱に包まれていた。父親はガムを萎ませ口に戻すと、にやりとして言った。

「ブランクがあつたけど、まあ、こんなもんな」

③ 少年の目は、すっかり尊敬の光に満ちていた。

「お父さんって、お母さんに怒られる以外にも特技があつたんだね」

苦笑しながらも、父親は誇らしげに「まあな」と答えた。

と、少年は、懇願するように父親のほうに身を乗り出した。

「ねえ、どうすればお父さんみたいな音が出せるようになるの？ みんなできるのに、ぼくだけうまくならないんだよ」

「そりゃあすぐにはできないさ。お父さんだって、夢中になって練習したんだから。でも、コツをひとつ教えてやろう。それはな、空気を出し入れするときのリズムがキモになる」

「どうやるの」

「本物のカエルをまねるのさ。お父さんも、むかしはよく田んぼでカエルを観察して動きを身体にたたきこんだもんだ。言葉にするのは難しいけどなあ、ふっふっふっふって小刻みに動かす感じかな。リズムさえうまく取れば、あとは自然に音が出る。カエルガムはそういうふうにできてるからな。それからアレだ、だんだん思い出してきた。応用編ができるやつは周りにいるか？ 慣れると、こんなこともできるようになるんだぞ」

そう言うと、父親は再びガムをぷくくりさせた。そして今度は、先ほどとは違うリズムでガムを動かしはじめた。

「トノサマガエルの鳴き声だ！」

「もつとゆつたりリズムを取ると、こういう音も出る」

「ウシガエル!」

少年は興奮の絶頂で、すごいすごいと連呼した。あまりの高揚で自分もやってみたくて衝動に駆られたのか、少年は満足気な父親を前に箱からガムを取り出した。口にふくんでよく噛むと、それを大きく膨らませる。

が、刹那のことだった。

ばん、と小さな音がして、ガムはべちつと顔いっぱいへばりついた。

「なんだ、膨らませるところからできないのか」

笑う父親に、少年はごまかすように視線を宙へと泳がせた。

「まあ、練習あるのみだな。カエルガムをマスターすれば、いいことだったたくさんあるからがんばることだ。④ 思えばお父さんも、このガムのおかげでたくさんいいことがあったなあ」

「いいことって?」

「学校中の人気者になれる。それから……」

「それから?」

と、父親はとつぜん話を変えた。

「ところで、カエルはどうして鳴くか知ってるか?」

少年は、⑤ かぶりを振る。

「カエルはな、オスがメスに自分をアピールするために鳴くんだよ。だからカエルは、オスしか鳴き袋を持ってない」

「へええ」

「それで、お父さんの身に起こった、いいことっていうのはだ」

少年は好奇に満ちた瞳で話に聞き入った。

「ほんとのカエルみたいなことが起こったんだよ。ずいぶんあとになってからのことさ。小学校の同窓会で、なんとお父さんのカエルガムの腕前のことを覚えてくれてたヒトがいてね。話がすごく盛り上がって、とくべつ仲良くなるまであつという間だった。お父さんのカエルガムの出す音は、まさに本物のカエルみたいに女心に響く音色だったというわけさ」

「その人って……」

小さくうなづく父親に、少年は瞬時のうちにすべてを悟ってぱっと明るい顔をした。

父親は、よっしゃと言って、いたずらっぽいやつを笑顔をさせた。

「その気があるなら今から少し特訓してみるか。ま、へたくそでも音くらいはすぐに出せるようになるさ。今夜はひとつ、父と息子のカエルの歌の合唱会でも開いてやろうじゃないか」

「楽しそう!」⑥ お客が一人の、とつてもぜいたくな合唱会だね

少年が言うと、父親はなぜだかうれしそうな、照れたような顔になった。

「それなんだけどな、どうやら観客は一人じゃないらしいんだよ」

「だれか来るの? 知らない人の前でやるのは恥ずかしいよ」

「そうじゃなくて。ほら、今日はとくべつな日だって言っただろ?」

そういえば、と思出し、少年は少し黙って何の日だろうと考えた。

すっかり暗くなった田んぼでは、カエルの声が世界のすべてを占めている。

「ヒントは、こうだ」

父親は、ガムをぶくつと膨らませる。

「こんなふうに、大きくなること」

「分かんないよ……」

「じゃあ、もうひとつ。カエルのメスは鳴き袋を持ってないって言っただろ。その代わり、メスの場合は身体のある部分が大きく膨らむことがある。ガムみたいにね。それはどこか」

「あー!」

少年の目に、ぱっと輝きが宿る。

「お腹だね！ え、それじゃあ、お母さんも!？」

「昼間に電話がかかってきてね。だから今夜はお祝いだ」

歓喜の声をあげる少年を、父親は笑顔で制して言った。

「でもその前に。合唱会をやるんだろ？ それならちゃんと特訓しておかなきゃな。なんてったって、お母さんが特別ゲストを連れてくるんだ。お腹の中で驚くほどの素敵な歌を聴かせてやろうじゃないか」

(田丸雅智「カエルガム」による)

問1 —— a 「にわか」・ b 「いそいそ」とありますが、この二つの語の意味としてもっともふさわしいものを、それぞれ後のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

a 「にわか」

ア ぼんやりと

イ ところどころ

ウ 明るく

エ 激しく

オ 急に

b 「いそいそ」

ア 急いで

イ うれしそうに

ウ ゆっくりと

エ 落ち着きなく

オ 丁寧に

問2 —— ① 「きょうはとくべつな日だからなあ」とありますが、「とくべつな日」とは具体的にどういう日のことですか。全体を読んで説明しなさい。

問3 —— ② 「父親は苦笑を浮かべて言った」とありますが、父親が「苦笑を浮かべ」たのはなぜですか。理由を説明しなさい。

問4 —— ③ 「少年の目は、すっかり尊敬の光に満ちていた」とありますが、少年が父親を尊敬したのはなぜですか。理由を説明しなさい。

問5 —— ④ 「思えばお父さんも、このガムのおかげでたくさんいいことがあったなあ」とありますが、父親の言う「いいこと」とは具体的にどのようなことですか。二つに分けて、それぞれ十五字以内で説明しなさい。

問6 —— ⑤ 「かぶりを振る」とありますが、「かぶり」とは体のどこを指しますか。漢字一字で答えなさい。

問7 —— ⑥ 「お客が一人」とありますが、これは具体的にだれのことを指しますか。本文中のことばを抜き出して答えなさい。

問8 この作品について説明した文としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 夕陽が沈み、しだいにあたりが闇に包まれる時間帯をあえて設定することにより、この後「少年」一家に訪れることになるだろう未来が、それとなく暗示されている。

イ 作品全体を通して、カエルの鳴き声が終始響き渡り、それ以外の物音をかき消す描写を行うことで、「父親」だけに心を開いている「少年」の様子が象徴的に表されている。

ウ カエルガムの一件を通して、それまで遠慮し合っていた「少年」と「父親」が歩み寄り、良好な関係を築いていく様子が、時間の流れに即して順に描かれている。

エ ヒントは与えつつも最終的な解答までは言語化しない「父親」の発言により、読者も「少年」とともに、「父親」が何を言いたいのかを推測しながら作品世界に入り込めるようになっていく。

オ カエルの鳴き声や泥の香りなど、五感に訴えかける表現を多用することで、豊かな自然の中に生きることのすばらしさを読者に伝えるようとする作者の意図が明確になっている。

